



..... No8-2019.12.7

自由律俳句協会ニュースレター

.....

発行：自由律俳句協会

(このニュースレターでは自由律俳句協会の最新の活動状況をお伝えしていきます)

自由律俳句協会総会が開催されました



2019年10月27日14時より東京・江東区の芭蕉記念館で、2018年度の自由律俳句協会総会が開催されました。協会の個人会員はこの一年で61名になりました。団体会員は「海紅」「群妙」「茉莉花」の3団体です。この日、出席会員は16名、葉書での委任状は25名、合わせて41名となり全体の3分の2に達したため、総会は成立しました。議案として提出されたものは以下の3つでいずれも承認されました。

【第1号議案】2018年度事業報告・会計報告

(1) 事業報告 (会長：佐瀬) このままでいくと自由律自体が泡のように消えていくという危機感から立ち上がった当協会、この一年、自分たちでできる範囲の事業を手がけてきました。

「ニュースレターの発行」「電子書籍の刊行」「ホームページのリニューアル」「“自由律の泉”のスタート」「文学フリマ東京への出店」

(2) 会計報告 (会計：平岡) 当年度の収入は会員からの会費と、前年からの繰越金、会員からの賛助金です。費用はニュースの発行、文学フリマの参加費、施設利用費などがありました。この収支を見ますと会費だけでは賄えなかったと考えます。一部会員からは年会費3,000円では無理があるのではというアンケート・コメントをいただいています。

【第2号議案】2019年度活動計画 (会長：佐瀬)

新年度は、企画ごとにプロジェクトを組み、多くの会員の方々に参加を呼びかけ、個々の負担を軽減しながら、結実をめざします。現在、具体的に取り組みたい事業企画をあげます。

- ① ニュースレターの発行…これについては新年度から、活動報告・情報提供に特化します。
- ② (新事業) 機関誌発行…会員の方々が投句し作品を発表する場、さらに句論を展開する場としての機関誌を発行を目指します。これまで、ニュースレターの中で展開してきた「自由律俳句への窓」「自由律の“泉”」は、いずれこの新機関誌の中へと統合し発展させていく予定です。 ※当面、「自由律の“泉”」はニュースレターとともに別刷でお届けします。
- ③ ホームページの活用と電子書籍の充実
- ④ オンデマンド冊子ライブラリー
- ④ 年鑑の発行…各地の結社グループの活動状況、さらにその系譜、歴史を盛り込み、全国の自由律俳句活動を眺望できる「年鑑」の発行を目指します。

- ⑤ シンポジウムの開催…今総会后、シンポジウム「自由律俳句という選択～私の視点～」を開催、これを皮切りに多彩なシンポジウムを企画実現していきます。
- ⑥ 自由律俳句協会大賞・奨励賞の設立…今総会后、自由律俳句協会奨励賞贈賞式をおこない、来年度総会では、自由律俳句協会大賞の贈賞式を計画しています。

【第3号議案】2019年度役員体制

(会長) 佐瀬広隆 (副会長) 中塚唯人 (事務局) 白松いちろう (会計) 平岡久美子
 (企画広報) 梶原由紀 さいとうこう 新山賢治 そねだゆ 寺田和可 野谷真治 吉本知裕
 (地域連携部) 高村昌慶 富永順子 (会計監査) 黒瀬 文子
 (※五十音順)

第1回自由律俳句協会奨励賞贈賞式

自由律俳句の普及、啓蒙活動に奔走された団体・個人に佐瀬会長より賞状と副賞が手渡されました。

◆ 個人賞1 棚橋麗未氏

講評(黒瀬文子氏)「現在棚橋さんは白ゆり句会の代表を務められています。棚橋さんが俳句をはじめられたのはお子さんのPTA活動からだといえます。その指導に『感動律』の代表だった内田南草、瀬戸青天城さんが当たられて、そのご縁で今までずっと俳句を続けてこられました。今年93歳になられますが、句風は老いることがありません。棚橋さんは句会の後、私たちにいつも『皆さんよく勉強してきましたね』とおっしゃいます。でも勉強なら棚橋さんが誰よりもなさっています。これからも後に続く者にとって高い目標となっていただけようお願いいたします。」

◆ 個人賞2 富永鳩山氏 ※富永氏欠席の為、山口県防府より出席の佐川智英実さんが代理受賞

講評(中塚唯人氏)「『群妙』の主宰者である氏は、傘寿を越えて尚、書道と自由律俳句の両界で活躍されています。山頭火の顕彰による自由律句の復活、地元山口でNHK・新聞・図書館を通じて啓蒙されておられます。富永さんの書体による山頭火の句碑が各地に立てられてきました。温かい人柄と共に人々の暮らしに根ざした句作りを続けておられる氏が当協会におられることは我々の誇りであります。」

◆ 団体賞 木村緑平顕彰会 ※梶島守会長欠席の為、福岡県柳川より出席の荻島架人さん代理受賞

講評(平岡久美子氏)「木村緑平顕彰会は句碑祭が発足して51年になります。当初は緑平さんを慕う有志の集まりだったといえます。木村緑平さんは種田山頭火のよき理解者でした。現在山頭火を知らない人は少ないと思いますが、それは緑平さんに負うところが多いと感じます。この会が半世紀以上にわたって熱心に続けてこられただけでも立派ですが、平成28年から緑平ジュニア賞も設けられ、今年は柳川市の小・中学校から5400句が集まったといいました。これも素晴らしい実践と思います。」



協会主催の公開シンポジウムを開催しました

総会后、10月24日16時より、同所にて自由律俳句協会として初のシンポジウムを開催しました。こちらは協会員以外も参加できる公開シンポジウムとし、当日は、若手俳人中心に会員外の9名を加えて、参加者25名となりました。

シンポジウムでは、まず異なる視点から自由律俳句を見直す2つの基調講演、その後、参加者を交えてのフリーディスカッションを行いました。

テーマ：「自由律俳句という選択～私の視点」

1) 講演①「俳句」について考えること（佐瀬広隆氏）

自由律俳句は松尾芭蕉以来の俳句の本筋と精神を引き継ぐ“現代版の俳句”であるという矜持を持つ佐瀬氏。俳句のつくり方の基本的な思想として荻原井泉水が説いた「自然・自己・自由の三位一体」「おのずから生まれるもの」という考え方が、まさに芭蕉の俳句に貫かれる精神に通じるものであるとの見方を示し、俳句は日本の大切な文化だという熱い思いが語られました。さらに、自由律俳句は「俳句」であるべきだという立場から、荻原井泉水の『俳句の手』という入門書の例を引いて、「二中心論」など、俳句独特の表現の形について解説されました。

2) 講演② イイ感じを生み出すもの（石川 聡氏）

パソコン通信をきっかけに自由律俳句を知り、近年は手軽に句を発表する場としてツイッターを活用しているという石川氏。そこで出会った川柳・短歌人との交流から気づいた自由律俳句の魅力が、五七五に捉われないオリジナルの韻律をつくりだし、「イイ感じ」を自分で決められることだといいます。自由律ならではの韻律の楽しさを、例句の音韻、リズムに注目し、音符などの図も駆使した分析が示されました。

3) フリーディスカッション（司会：さいとうこう氏、梶原由紀氏）

協会若手会員二人の司会で、まずは基調講演への質疑応答を皮切りに、参加者を巻き込んで活発な議論がかわされました。ツイッターをはじめ、SNSが自由律俳句との出会いや発表の場となっている若者も増えているようですが、会員外の若手俳人の発言に、自由律俳句の裾野の広がりが改めて感じられました。

また、「自由律俳句にタブーはあるのか？」「いま自由律俳句への入口はどこにある？」といった話題について、当日欠席されたベテラン俳人の富永鳩山氏や久光良一氏から寄せられたコメントを交えて話し合いました。タブーについて、毎日新聞山口版で自由律俳句欄の選をされている富永氏からは、自由律俳句としてどこまでがよくてどこからダメなのかは課題としながらも、「今は間口を広げて実際に句をつくってもらえたらと思っている。感動する句を紹介していけば、少しずつわかってもらえるのではないか」といったお話がありました。入口については、自由律俳句に縁の深い郷里に帰ったのを機に聞



心をもったという久光氏は「若い頃詩作をしていたので、一行詩に近い自由律俳句にもすぐなじめた」とのこと。若い世代に広めていくには「山頭火や放哉にこだわらない、新しいアピールの方向を模索するべきではないか」というお話もありました。参加者のなかにも、もともと詩が好きという人もあり、せきしろさんの句に出会って放哉を知ったという人、ツイッターでフランス人の俳句好きから住宅謙信を紹介されたのがきっかけという人もいました。

福岡、山口、岡山といった遠方からの参加者を含め、20歳代から90歳代まで会員・非会員を問わず熱心な討論が行われ、予定の1時間半はあっという間に過ぎて、参加者の賛同を得てディスカッションは延長戦に。参加者一人ひとりからさまざまな視点が提供され、多くの刺激を得て、自由律俳句の今後の可能性を期待させるシンポジウムとなりました。（寺田和可）

★「月刊俳句界」2020年2月号（1/25発売）に総会およびシンポジウムのレポート記事が掲載されます。

●総会を終えて…………… 佐瀬広隆

総会では、小さな一歩を企画し実行をしてきたこの1年を振り返り、次はこうした一歩を拡充してゆくとともに、新たに年鑑の発行、これまでのニュースレターの役割を分担し、レター（報告記事）と機関誌（文芸）に分割することになりました。自由律俳句協会奨励賞も小さな一歩ですが、実施しました。更に開かれた受賞選考の方法を詰めてゆきたいと考えています。また、各結社への働きかけを行うことを確認しました。

シンポジウムでは、自由律俳句は俳句であることの形式からの説明、自由律俳句を実作することの楽しみ方の講演・討論が行われました。こうした活動をリードしてゆくことこそ協会として大切な仕事だと思います。反省をふまえ、こうした試みの蓄積をしてゆければと考えています。

年鑑、機関誌の発行を企画・実行するには、会員皆様のご協力と行動するマンパワーが必要です。是非こうした企画に関わってゆきたいという人の協力が増えればと思います。地域が離れてできないと考えられる人がいらっしやるとはありますが、通信（パソコンやスマホ等）の工夫で解決できると考えます。

よりよい自由律俳句協会にしてゆくために、会員皆様のご協力とお力をお貸し下さい。

速報 2020年5月6日開催の「文学フリマ東京」参加決定！

「第30回文学フリマ東京」の参加申し込み手続きが完了し、自由律俳句協会としての出店が決定しました！ フリマに出品する句集などの制作をお考えの会員は、準備をお願いします。

協会のプロジェクトとして、若手作家の作品を紹介する冊子の制作も始めます（こちらの参加案内は「自由律の泉」末尾をご覧ください）。

自由律俳句協会 事務局

〒270-2329 千葉県印西市滝野 2-6-16 白松いちろう方

e-mail: siroo@mist.ocn.ne.jp TEL&FAX 0476-80-9177

ホームページ: <https://www.自由律.com/> ツイッター: 自由律俳句協会@jihaijkyo